

酒田市蕨台遺跡の出土遺物について

植松暁彦

1 はじめに

酒田市の蕨台遺跡は、平成5年度に（財）山形県埋蔵文化財センターで発掘調査を行い、県内では数少ない縄文時代後期初頭の住居跡や、新潟県に主体を持つ三十稲場式に類似した土器が出土し知られる。一方、報告書では、一部破片資料の出土地点が不明瞭なところがあった。

本稿では、土器の注記を確認し出土地点を特定し、遺構の時期、他遺物との出土分布域の相違などを検討する。

2 蕨台遺跡の概要と研究史・土器編年

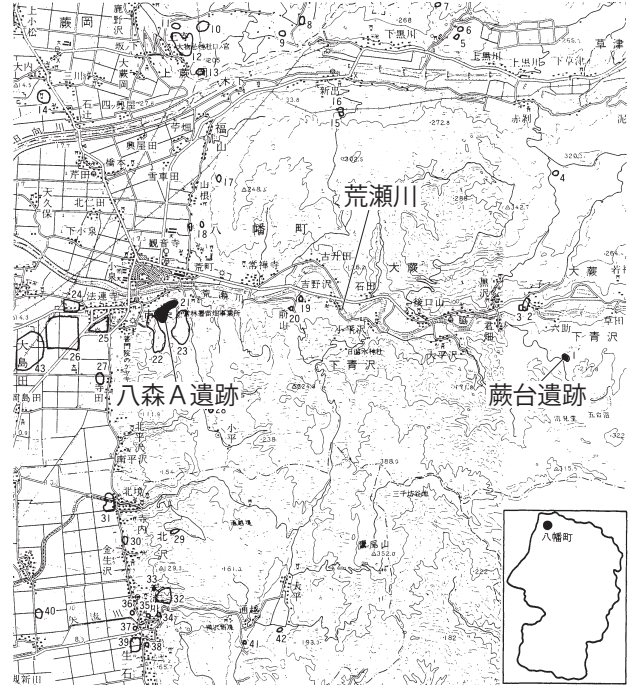
蕨台遺跡は、庄内平野北部の旧八幡町（現酒田市）大字下青沢字蕨台に位置し、荒瀬川上流左岸の丘陵上に立地する。周辺には、蕨台遺跡とほぼ同時期の八森遺跡が西に約20km離れて荒瀬川左岸に分布する（第1図）。

平成2年度（1990）の県教育委員会の分布調査によって新規発見され、概ね東西約130m、南北約50mの遺跡範囲が登録された（渋谷他1991）。

平成5年（1993）に、国営農地開発事業鳥海南麓地区に伴い、当センターで約5,000㎡が発掘調査され、縄文時代の竪穴住居8棟や土坑などが確認された。出土遺物は、コンテナで約60箱出土している（第2図）。

報告書は、当該年度に当センター調査報告書第5集として整理・刊行され、報文で「縄文時代中期～後期にかけての時代」（斎藤他1994）とされた。また、抄録の特記事項として「台地上に環状に住居跡が8棟検出された。その内、重複する（中略）ものが4棟みられた。土器を転用した炉や地床炉も検出された。遺物では沈線を施した板状土偶が出土した。その中で磨製石斧が30点出土したのが目立つ」などの特徴が上げられている。

この調査成果により、蕨台遺跡は、県内では数少ない縄文時代中期末～後期初頭の集落で、当該期の住居形態や遺物相などを知る上で貴重な資料となった。また、報文では触れられていないが、後述する新潟県で盛隆する後期初頭の体部に刺突文を施す所謂「三十稲場式」に類



第1図 遺跡位置図

似した土器（本稿では「三十稲場式土器」と呼称。以下、同じ）が一定量出土し注目された。

この三十稲場式土器は、隣県の新潟県に主体的で、1980年代から田中耕作氏の先鞭的な研究が継続される（田中1985・1989・1990・2019）。近年も石坂圭介氏、宮尾亨氏、佐藤雅一氏、阿部昭典氏、渡邊裕之氏らにより精力的な研究が続く（渡邊1994、石坂2008、宮尾2008、佐藤・宮尾・阿部2012）。特に阿部氏は、三十稲場式の東北地方への広域的な広がりについて、「三十稲場式土器そのものないしは地域変容したものが客体的に分布する範囲は、隣接する福島県や山形県南部・宮城県南部に限られる」と指摘する（阿部2012）。

一方、本県の三十稲場式土器の研究は、1990年代に入り、発掘調査の増加に伴い資料数も増え、米沢市大樽遺跡（国井他1999）、小国町千野遺跡（須賀井他2000）で、時期変遷や分布の詳細な報告がされる。

また、渋谷孝雄氏は、蕨台遺跡を含む鳥海南麓地区の遺跡を整理し、遺跡立地、検出遺構、遺物量、石器組成から性格などを検討した（渋谷1997）。そして、同遺

跡は、「拠点的な集落となり得るもの」と評価し、「磨製石斧の占める割合が高いことが山間部に立地する本遺跡の特異性と捉えられるのかも知れない」と指摘する。

なお、菅原哲文氏は、この時期に当該期と境界をなす中期～後期初頭の土器群を整理された(菅原1995)。

2010年代には、菅原哲文氏が県内の「縄文時代中期から後期の遺跡分布」の一連の論考で、遺跡の時期変遷や一部三十稲場式系土器の出土遺跡などをまとめた(菅原2014・2016・2017)。他に、小林圭一氏が県内の縄文時代後期全体の遺跡立地などを集成され、当該期の様相を広く検討された(小林2001)。

2019年には、県立うきたむ風土記の丘考古資料館で『山形県の縄文時代後期』企画展があり、図録や講座で小林圭一氏が後期編年観、筆者も村山地域の様相を示した(渋谷・小林他2019・植松2019)。特に小林氏は、蔵台遺跡の三十稲場式系土器を後期初頭に位置付けた。

最後に、本稿の土器編年は、詳細は別稿に譲るが、中期末から後期の境界は菅原哲文氏(菅原1999)、後期初頭は須賀井新人氏(2000)、小林圭一氏(小林2019)、筆者の村山地方の編年(植松2019)を援用する(第3図)。主な時期区分は、中期末葉(大木10式新段階)、後期初頭古相(称名寺1式期併行)、同新相(称名寺2式期併行)、同前葉(堀之内式期併行)にあたる。

3 蔵台遺跡の土器の出土地点の特定と所見

蔵台遺跡の概要は前述した通りだが、報告書については、石器の観察表は掲載されるものの、土器は本文中に出土地点の記載が一部あるのみで、破片資料を主に観察表がなく、一部出土地点が不明瞭なものがあつた。

筆者は、本稿を作成するにあたり、報告書掲載の遺物を実見・注記を確認し、出土地点を含む器種や文様などの特徴を記した観察表を作成した。なお、報告書(第13～19図)では、土器の実測図に、個別で1～71の通し番号が付され、本項ではこの通し番号を利用し、「報図○(○は通し番号)」で表す。なお、実見中に判明した土器の接合や拓本の不備や、ST31かST37か判別不明瞭なものも表や図に追記した(第4・6・7図)。

その結果、報告書掲載の破片資料中にも遺構出土があり、グリッドや表採出土でも特徴的な土器があることが分かった(第5・6図)。以下に、所見を記す。

土器の様相と変遷(第3～6図) 蔵台遺跡の土器変遷では、大きく最も古い土器群として、縄文時代中期中葉～後葉に遡るものが僅かに単発的(SK38・ST37)にある。また、報文で図化はないが、写真図版に中期中葉の装飾の著しい深鉢や弧状の貼付文がある注口土器なども散見される(写真図版13下の上段土器)。

しかし、資料が少ないST1・8を除き、報告書掲載の住居跡や土坑の最新の土器群で見れば、遺跡の主体は、概ね中期末葉～後期初頭に位置付けられるようである。

特に住居群は、木根の攪乱も認められるが、断面図から覆土が約20cm程と浅いものが多い。住居出土の遺物は、相対的にほぼ床面直上の出土とも捉えられ、ある程度の住居年代を判断できるかもしれない。また、この住居群の中には、新潟県で後期初頭とされる三十稲場式系土器がST1・31・37などにあり、その証左になろう。

一方、住居出土の土器では、中期末(大木10式新段階)の重弧区画文(報図37.ST37)や、その系譜を引く重弧がやや直線化し、幅広の区画帯を有するもの(報図13・33.ST99)があり、後者はやや後出と考えられる。

そして、方形状の隆帯区画が主体的なST32・54と、次期の後期前葉に主体的な沈線区画(但し沈線区画に縄文・刺突の充填は中期末葉から出現)を有するST1・31・39があり、後者が全体に新しい時期とも考えられる。なお、報文では、重複するST31・32が「住居跡の壁面の形状や堆積土の状況からみてST32が新しいと考えられる」とするが、断面図(報文第8図)では層位が逆転し、ST32→ST31の新旧も窺え留意を要する。

また、ST32の報図3は、尾花沢市横内遺跡のST1出土資料(図3下段左-1。押切他2015で「中期末～後期前葉」と表記)と類似する。横内資料は、詳細は別稿に譲るが、沈線ながら方形状の区画、口縁部の突起、単独で垂下する「ノ」字状の隆帯など後期的な要素も推測される。ST32は、発達した隆帯や方形状区画から上記資料と同時期かやや後出と推測され、概ね図3下段左-1と同-2の間の時期に位置するものと考えられる。

他に、ST31の報図26(区画内は斜縄文)は、当遺跡と近接する八森遺跡資料(図3下段右-79。区画内は撚糸文。宮戸Ib式期)の鋭角な区画端と類似する。後期初頭でも後出の可能性が窺え、同遺跡では報図3の刺突を密にした形態の三十稲場式系土器(同-92)も出土。

住居以外の土坑やグリッド出土の土器では、報図6 (SP33) や報図7 (18-10 G) が、口縁部の隆帯垂下と共に、ST37 の報図3 と同じ、口縁部突起に刻みがあり、県内では類例に乏しく、中期末以降の単純な三角状突起より後出で、当地の地域性の可能性もある。

三十稲場式系土器では、報図27 が口縁部にS字状の隆帯が垂下し、体部は三十稲場式系土器の刺突で、後期初頭でも変容した形態で、やや後出と推測される。なお、報図8 は、口縁部に隆帯の渦巻文で中期的だが、頸部に刺突様の凹部があり、後期初頭に下るかもしれない。

他に報図30 は、刺突が密な爪形文で、小国町の事例では三十稲場式の新相とされる(須賀井2000)。

縄文施文のみの粗製土器では、全体に単節の縦回転のものが多い。報図9 は、口縁部に小形の台形状の突起を持ち、中期末には判然とせず後期的と考えられる。また、報図12・47・51 は、体部に縦位の結節縄文が施文され、ST99 と重なる出土グリッドを勘案すれば、後期に下る可能性がある。底部では、報文で網代痕と木葉痕と指摘され、後者は筋状が大半で、笹痕跡であろう。

そして、上記を遺構毎の供伴関係も勘案し、前述した土器の先行研究を援用すれば、古い要素では、中期末の系譜を引く重弧の隆帯区画→やや直線的な重弧隆帯区画の変遷が窺える。後期的な要素としては、口縁部突起の出現(三角状→刻目入)、隆帯の方形区画主体→沈線の区画主体、三十稲場式系土器の刺突(指頭)の花弁状→爪形状・小円孔(蕨台遺跡と同地域の庄内北部の八森遺跡・小山崎遺跡の事例から地域性の可能性もあり)、口縁部の幅の狭い横位沈線などに新旧があると大きくは推測された。これらから蕨台遺跡の主体は、概ね中期末を一部含み、後期初頭でも古相→新相の変遷が窺えた。

出土土器と遺構の様相・変遷(第7図) 次に、本項での破片資料の出土地点や、前述した土器の変遷を基に、グリッド等出土土器も含めた、報文で重複関係があるとされた住居跡や土坑の様相や変遷を概観する。

最初に、土器の分布では、整理作業では一般に実測可能なものが報告書に抽出されることから、調査区内での出土点数をグリッド毎(遺構出土は、その遺構の主体のグリッドに含めた。復元資料・破片資料も個体数を把握するため1点と計測)に数値化し、その濃淡を表した。

その結果、報文掲載土器は、竪穴住居跡や土坑が集

中する地域に多く分布し、特にST37 やST31、ST99、SK38 周辺では5点以上が分布・出土する。但し、報文で完形土器として紹介されるST32 (RP18:報図1) やST54 (RP2:報図2) は希薄で、限定的である。

一方で、その遺構の集中部以外は、単発的に包含層から出土する程度で、特に調査区南側の谷地形には、ほとんど土器の分布は認められず、縄文遺跡に一般的な谷部を利用した所謂「捨て場」は存在しないようである。

そして、これらの遺構の時期は、前述した土器変遷で大きくみれば、破片資料が多く不明瞭な点はあるが、古相は三十稲場式系土器の花弁状の刺突文があるST37、隆帯の方形区画が主体のST32・54・99などが相当する。

新相は、遺構内の最新相や、沈線区画主体のST1・8(報文中にST1と主軸方向が同じとの指摘あり)・31・SK15・38が考えられる。なお、ST37は三十稲場式系土器の小円孔の刺突(報図3)があり、地床炉跡が3基あることから新相まで存続した可能性も窺える。

なお、住居内の炉跡は、石組炉2棟(ST9・32)や地床炉5棟(ST8・31・37[3基]・54・99)、土器を横位転用した土器転用炉(ST32。報文写真図版9下段)が報文にある。その差異は、住居形態や時期差によるものか判然としないが、前述した住居変遷に照らせば、重複するST32→ST31から、土器転用炉(但し同時期のST37・54・99は地床炉)→石組炉・地床炉の変遷が大きくは窺える。土器転用炉・石組炉は、直前の中期末に隆盛した複式炉の名残りではないか。

そして、報文で指摘する環状集落は、古相は時計回りにST99・37・32・54など長軸約10mの楕円形の環状に並び、新相はST99・1・37・31・8などに拡張し、長軸約20mの弧状に住居が並び、北側の集落開口部に、小規模な土坑群(SK15・38)が集中した可能性が窺える。

4 まとめ

前項までに蕨台遺跡の土器を主に変遷や特徴、遺構や集落の変遷や様相を概観した。最後に、既に報文で示される他の遺物も含め出土分布を整理し、まとめにかきたい。

報文では、所謂 tool の石器類や土偶など祭祀具、漁労に関する石錘の出土地点が観察表に全て明記される。これらを本項での土器と同じ方法(第8図)で、グリッド毎に濃淡をまとめた(第9～15図)。特に石器では、

狩猟や生活具の石鏃や石錘など多様な剥片石器類(第8図下)、堅果類の粉碎具とされる凹石・磨石など礫石器類(第9図上)、報文で当遺跡の特徴として上げられる磨製石斧(第9図下)に分け、その分布も概観した。

その結果、各種別で数量の過多はあるが、土器の分布と類似するのは、礫石器類と土偶の分布で、住居や土坑が集中する範囲に限定的である(Aタイプ)。

一方、剥片石器類と磨製石斧は、土器の分布より広大で、住居や土坑の集中外にも広がる。但し、剥片石器類は密集する分布域が土器の分布域と同じだが、磨製石斧は全体に希薄で、密集する分布域は特に認められない(Bタイプ)。そして、石錘は、最も土器の分布域と異なり、住居群の外側に分布する傾向が窺える(Cタイプ)。

これら遺物類は、大半が包含層のグリッド出土だが、遺構出土も多い土器の分布域と、前述したAタイプの分布域の共通性などから、集落域との相関が推測される。

そして、上記のタイプ毎の差異は、各遺物の性格に因ることも考えられ、大きくAタイプは住居や土坑が集中する集落域内、Cタイプは集落外、Bタイプはその両方を兼ねた遺物の使用(活動範囲)や廃棄が推測される。

この集落内での「場」のあり方は、当時の人々の行動を考える上で有効と考えられ、蕨台遺跡の①標高の高い丘陵上に立地、②小規模な集落、③捨て場を持たない、④時期幅の狭い、⑤漁労も行う、性格を有する遺跡の一つの「場」利用のモデルケースになるのではないか。

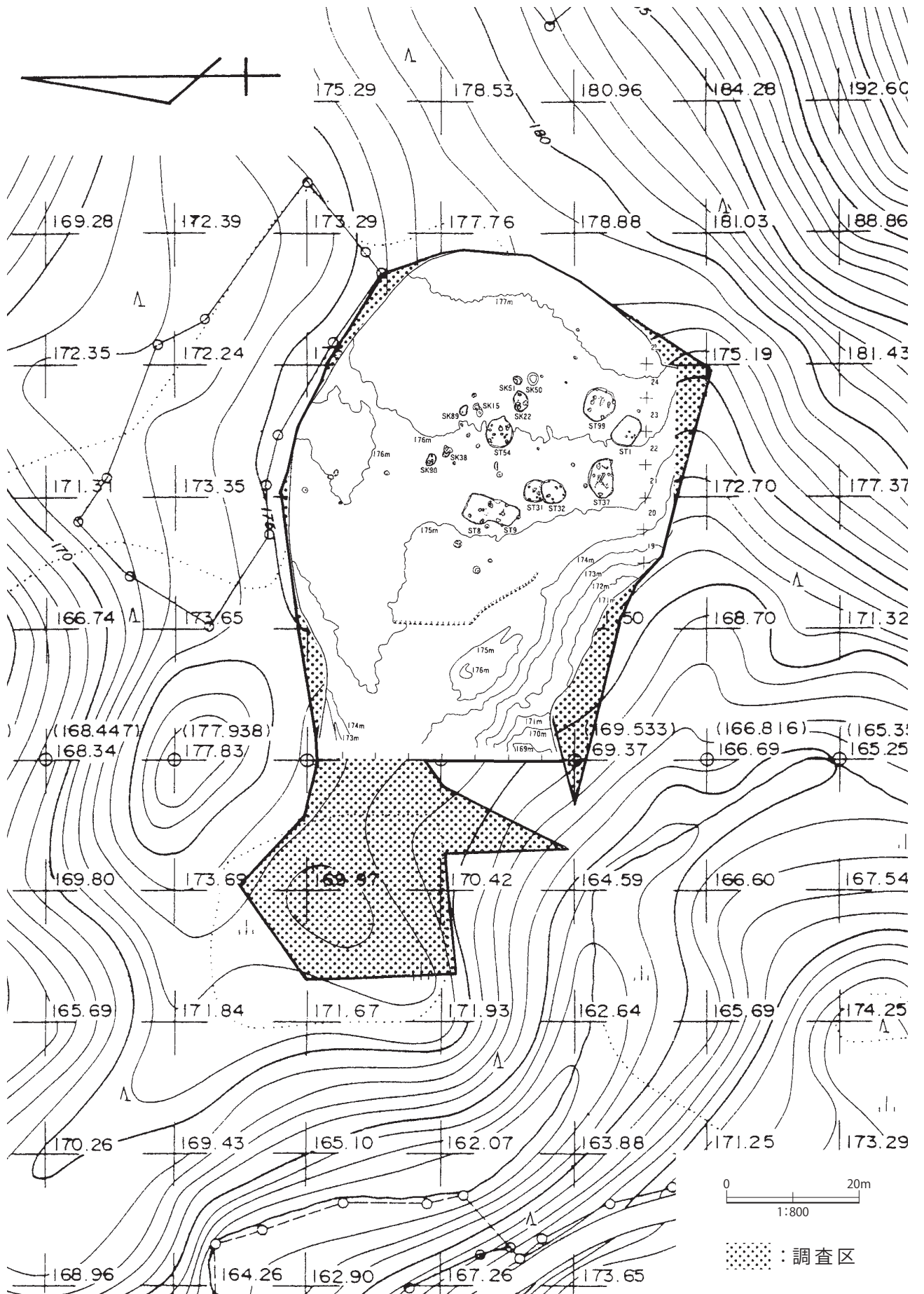
今後は、未報告遺物や、完形品と折損品の分布域の検討、他遺跡との比較なども行い、当時の集落での遺跡の性格を含めた「場」の使い方などを検討していきたい。

最後に、本稿を作成する上で、後藤枝里子氏、小林圭一氏、菅原哲文氏、相原淳一氏、齋藤守氏には多大なるご教示を得た。記して深謝したい。

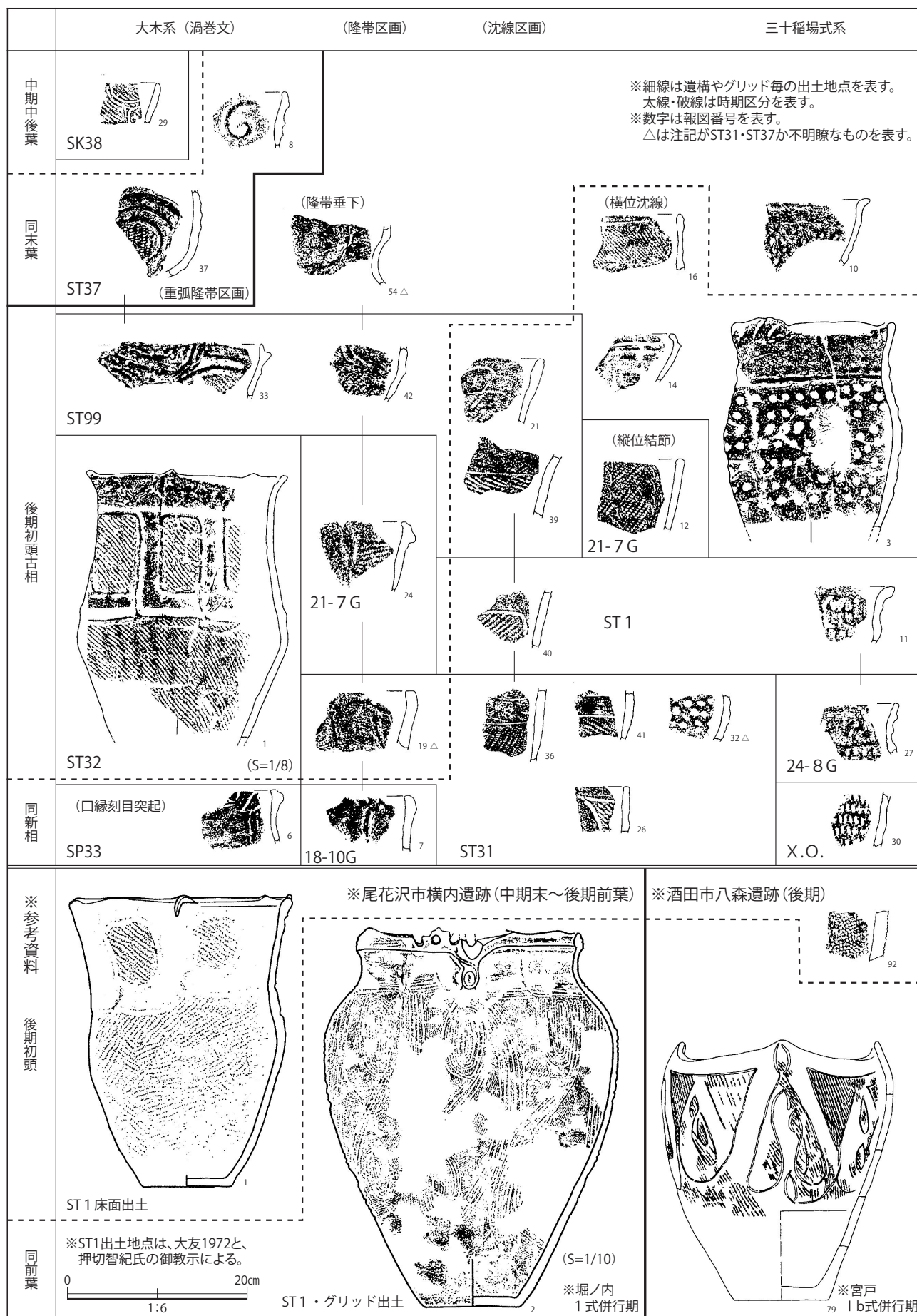
引用文献

- 相原淳一他 1988『大梁川遺跡・小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書126集 宮城県教育委員会
 佐藤雅一・宮尾亨 2012『三十稲場式土器文化の世界—4.3 K a イベントに関する考古学現象②—』津南町教育委員会
 阿部昭典 2012「縄文後期初頭における集落構造・住居形態の寛容と地域間関係」『三十稲場式土器文化の世界—4.3 K a イベントに関する考古学現象②—』津南町教育委員会
 阿部芳郎 1991「北陸北半地域における後期前葉土器型式の再検討—十三稲場式、南三十稲場式の構成と変遷」『信濃』第42巻第10号 信濃史学会
 石坂圭介 2008「三十稲場式土器」『総覧 縄文土器』『総覧

- 縄文土器』刊行委員会
 植松暁彦 2019「村山地方の縄文時代後期」『うきたむ企画展講座』発表資料 県立うきたむ風土記の丘考古資料館
 大友義助 1972「縄文時代住居跡 発見」『山形県立博物館ニュース第7号』山形県立博物館
 押切智紀・佐藤正俊 2015「山形県立博物館所蔵の横内遺跡出土土器について」『山形県立博物館研究報告』第33号 山形県立博物館
 國井修・黒坂雅人 1999「まとめ」『大樽遺跡発掘調査報告書』第67集 (公財)山形県埋蔵文化財センター
 後藤勝彦 1967『西ノ浜貝塚緊急調査報告書』宮城県文化財調査報告書13集 宮城県教育委員会
 小林圭一 2001「最上川流域における縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』第7巻第1号 山形考古学会
 小林圭一 2012「富並川流域の縄文時代の遺跡動態—西海湖・川口・宮の前遺跡の検討を通して—」『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究Ⅰ』東北芸術工科大学東北文化研究センター
 小林圭一 2019「山形県の縄文時代後期について」『山形県の縄文時代後期』県立うきたむ風土記の丘考古資料館企画展図録
 齋藤守 1994『蕨台遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第5集 (財)山形県埋蔵文化財センター
 佐藤禎宏他 2003『八森遺跡 - 先史図録編』八幡町教育委員会
 渋谷孝雄他 1991『山形県遺跡分布調査報告書(19)』第117集 山形県教育委員会
 渋谷孝雄 1997「国営農地開発事業島海南麓地区の考古学的調査の成果」『山形考古』第6巻第1号(通巻27号) 山形考古学会
 渋谷孝雄他 2020『山形県の縄文後期』県立うきたむ風土記の丘考古資料館企画展図録
 須賀井新人 2000『千野遺跡・市野々向原遺跡・野向遺跡発掘調査報告書』第71集 (公財)山形県埋蔵文化財センター
 菅原哲文 1999「山形県における縄文時代中期の土器様相」『山形考古』第6巻第3号 山形考古学会
 菅原哲文 2014「最上川中流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布」『研究紀要』6号 (公財)山形県埋蔵文化財センター
 菅原哲文 2016「最上川上流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布」『研究紀要』8号 (公財)山形県埋蔵文化財センター
 菅原哲文 2017「最上川中・下流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布」『研究紀要』9号 (公財)山形県埋蔵文化財センター
 田中耕作 1985「所謂「三十稲場式土器」の成立について」『信濃』第37号第4号
 田中耕作 1989「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観』小学館
 田中耕作 1990「三十稲場式土器の研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第5号 新潟考古学談話会
 田中耕作 2019「第5項 後期」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
 本間宏 2008「南境式・網取式土器」『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会
 森幸彦 2008「大木9・10式土器」『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会
 山内清男 1937「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』1巻1号
 山内清男 1964『日本原始美術』第1巻 講談社
 渡邊裕之 1994「三十稲場式土器」『縄文時代研究辞典』東京堂出版



第2図 調査区概要図



第3図 蕨台遺跡の土器変遷図

第4図 炭台遺跡調査報告書の土器等観察表

図	番号	種別	器種	出土位置	登録番号	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	文様・地文など	時期	備考	
13	1	縄文土器	深鉢	ST32	RP18	294	(386)		口縁部三角状突起、隆帯垂下。 体部方形区画文(区画内L(RRR))	後期初頭古相		
	2	縄文土器	深鉢	ST54	RP 2		(234)		地文L(縦)	粗製		
	3	縄文土器	深鉢	ST37	RP20	182	(256)		口縁部刻み入突起、無文帯に隆帯垂下。 頸部隆帯。体部刺突文(円形)	後期初頭新相	三十稲場式系(刺突竹管) 突起刻み特異	
14	4	円板状土製品		ST37		47			地文L		口径は直径を表す	
	5	円板状土製品		21-7-I		46			地文LR		口径は直径を表す	
	6	縄文土器	深鉢	SP33			(56)		口縁部刻み入突起、無文帯に隆帯垂下	後期初頭新相	突起刻み特異	
	7	縄文土器	深鉢	18-10-I			(61)		口縁部刻み入突起、無文帯に隆帯垂下	後期初頭新相	突起刻み特異。外面炭化物	
	8	縄文土器	深鉢	ST37			(59)		口縁部無文帯に隆帯渦巻文 頸部下に突起痕か	中期末か		
	9	縄文土器	深鉢	17-17-I			(37)		口縁部突起。地文LR	粗製	補修孔	
	10	縄文土器	深鉢	ST37	RP16		(73)		口縁部無文帯。体部刺突文(花卉状)	後期初頭	三十稲場式系(刺突指頭)	
	11	縄文土器	深鉢	ST 1			(60)		口縁部無文帯。体部刺突文(花卉状)	後期初頭	三十稲場式系(刺突ヘラ)	
	12	縄文土器	深鉢	21-7-I			(77)		地文結節RL(縦)	粗製		
	13	縄文土器	深鉢	ST99			(58)		口縁部無文帯。体部重弧状隆帯区画(区画内RL・隆帯上に刻目)	中期末～ 後期初頭	15-33と接合	
	14	縄文土器	鉢	ST37			(52)		口縁部無文帯に横位沈線	後期初頭か	内面炭化物	
	15	縄文土器	深鉢	ST31			(48)		口縁部波状突起、無文帯に横位隆帯	後期初頭か	拓本逆位に報告	
	16	縄文土器	深鉢	ST37			(63)		口縁部無文帯に横位沈線。 区画文。地文L(縦)	後期初頭か		
	17	縄文土器	鉢	22-8-I			(43)		口縁部無文帯に横位沈線。 区画文(区画内LR)	後期初頭か	口縁部で報告。非口縁	
	18	縄文土器	深鉢	SK15			(39)		口縁部無文帯に横位沈線。地文LR	後期初頭か		
	15	19	縄文土器	深鉢	ST31			(64)		口縁部幅広突起、無文帯に隆帯垂下区画(方形)	後期初頭古相	注記ST37の可能性もあり
		20	縄文土器	深鉢	SK38			(48)		口縁部無文帯に横位沈線。LR	後期初頭か	
		21	縄文土器	深鉢	ST99			(71)		口縁部波状突起、無文帯に沈線区画(方形状か)。RL(縦)	後期初頭か	
22		縄文土器	深鉢	9-11-II			(70)		口縁部無文帯。 沈線区画(区画内縄文押圧)	中期末～後期初	区画内縄文はRL	
23		縄文土器	深鉢	SK38			(40)		口縁部無文帯。沈線区画(区画内RL)	中期末～後期初	突起確認	
24		縄文土器	深鉢	21-7-I			(75)		鱗状隆帯区画(区画内LR)	中期末～後期初		
25		縄文土器	深鉢	XO			(65)		口縁部無文帯。沈線区画(区画内RL)	中期末～後期初		
26		縄文土器	深鉢	ST31			(50)		口縁部無文帯。沈線区画(区画内LR)	後期初頭か		
27		縄文土器	深鉢	24-8			(55)		口縁部無文帯にS字状隆帯垂下。 体部刺突文(花卉状)	後期初頭新相	隆帯垂下と刺突文。 三十稲場式系(刺突ヘラ)	
28		縄文土器	深鉢	SK38			(42)		口縁部隆帯区画(長方形か)	中期末～後期初		
29		縄文土器	深鉢	SK38			(45)		沈線渦巻文。LR(縦)	中期中葉(8b式)	中期	
30		縄文土器	深鉢	XO			(59)		体部刺突文(爪形状)	後期初頭新相	三十稲場式系(刺突ヘラ)	
31		縄文土器	深鉢	XO			(41)		体部刺突文(花卉状)	後期初頭	三十稲場式系(刺突ヘラ)	
32		縄文土器	深鉢	ST31			(48)		体部刺突文(花卉状)	後期初頭	三十稲場式系(刺突ヘラ) 注記ST37の可能性あり	
33		縄文土器	深鉢	ST99			(63)		体部重弧状隆帯区画	中期末～後期初	14-13と接合。 重弧が直線的	
16		34	縄文土器	深鉢	24-9-I			(52)		体部重弧状隆帯区画	中期末～後期初	重弧がやや直線的
	35	縄文土器	深鉢	XO			(62)		隆帯区画(区画内RL)	中期末～後期初		
	36	縄文土器	深鉢	ST31EL 2			(79)		沈線区画。RL(縦)	中期末～後期初		
	37	縄文土器	深鉢	ST37			(96)		重弧状隆帯区画(区画内RL)	中期末(10式)	区画弧状か(中期的)	
	38	縄文土器	深鉢	27-6			(70)		鱗状隆帯区画(区画内RL)	中期末～後期初		
	39	縄文土器	深鉢	ST99			(67)		沈線区画。LR(縦)	中期末～後期初		
	40	縄文土器	深鉢	ST 1			(61)		沈線区画(区画内LR)	中期末～後期初	区画方形か	
	41	縄文土器	深鉢	ST31EL 2			(51)		沈線区画。RL	中期末～後期初		
	42	縄文土器	深鉢	ST99			(58)		隆帯区画(区画内磨消)。LRか	中期末～後期初		
	43	縄文土器	深鉢	ST54			(65)		隆帯区画(区画内磨消)。RL	後期初か	クランク状か	
	44	縄文土器	深鉢	21-8-I			(71)		沈線区画。LR	中期末～後期初		
	45	縄文土器	深鉢	SK38			(58)		地文LR	粗製		
	46	縄文土器	深鉢	ST37			(63)		横位隆帯・無文帯。地文RL(縦)	後期初頭	外面炭化物	
	17	47	縄文土器	深鉢	XO			(78)		地文結節RL(縦)	粗製	

図	番号	種別	器種	出土位置	登録番号	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	文様・地文など	時期	備考
17	48	縄文土器	深鉢	21- 7- I			(72)		地文 LR か	粗製	
	49	縄文土器	深鉢	ST37			(60)		地文 LR	粗製	
	50	縄文土器	深鉢	21- 7- I			(57)		地文 LR (縦)	粗製	粗い縄文
	51	縄文土器	深鉢	21- 7- I			(80)		地文結節 LR (縦)	粗製	
	52	縄文土器	深鉢	24- 8			(90)		隆帯区画 (方形状)。RL	後期初頭	
	53	縄文土器	深鉢	ST37			(71)		重弧隆帯区画。撚糸 R	中期末～後期初	
	54	縄文土器	深鉢	ST37			(63)		隆帯垂下 (ノの字状)	後期初頭	注記 ST31 の可能性もあり
	55	縄文土器	深鉢	ST37			(85)		重弧隆帯区画 (区画内 LR か)	中期末～後期初	注記 ST31 の可能性もあり
56	縄文土器	深鉢	XO			(80)		沈線区画。RL	中期末～後期初	沈線区画→RL	
18	57	縄文土器	深鉢	ST 8			(18)		網代		底部
	58	縄文土器	深鉢	19-13- I					網代		底部
	59	縄文土器	深鉢	19-13- I		(25)	(85)		網代		底部
	60	縄文土器	深鉢	ST 1		(25)	(100)		網代	ST 1 後期初頭	底部
	61	縄文土器	深鉢	19-13- I		(35)	(117)		網代		底部
	62	縄文土器	深鉢	19-13- I		(48)	(100)		網代		底部
	63	縄文土器	深鉢	20-10- I		(18)	106		網代		底部
	64	縄文土器	深鉢	SP33		(54)	(102)		地文 LR。網代か		底部
19	65	縄文土器	深鉢	22-12- I		(31)	60				底部。小形
	66	縄文土器	深鉢	ST37		(32)	49				底部。小形
	67	縄文土器	深鉢	24-11- I		(43)	62		笹痕か		底部。小形
	68	縄文土器	深鉢	ST37 内	RP16	(42)	78		笹痕か	ST37 後期初頭	底部
	69	縄文土器	深鉢	ST37			82		笹痕か		底部
	70	縄文土器	深鉢	23-14- I		(21)	118		笹痕か		底部
	71	縄文土器	深鉢		RP 8	(32)	108		笹痕か		底部
20	1	土偶		18-10- I		(47)			細い沈線		板状。肩に穿孔痕
	2	土偶		20-13	RP 1	(94)			細い沈線。渦巻文	中期か	
	3	土偶		22-14		(50)			細い沈線		板状。肩に穿孔痕
	4	土偶		22-12- I		(80)				中期末か	板状。肩に穿孔痕
	5	土偶		21- 9		(59)			密な刺突文	後期初頭か	板状。肩に穿孔痕

※ 土器の規模は、報告書の図より計測。口径・底径の括弧は推測値、器高の括弧は残存値を表す。

※ 土偶の器高は報文中の「現存部の高さ」から表記。

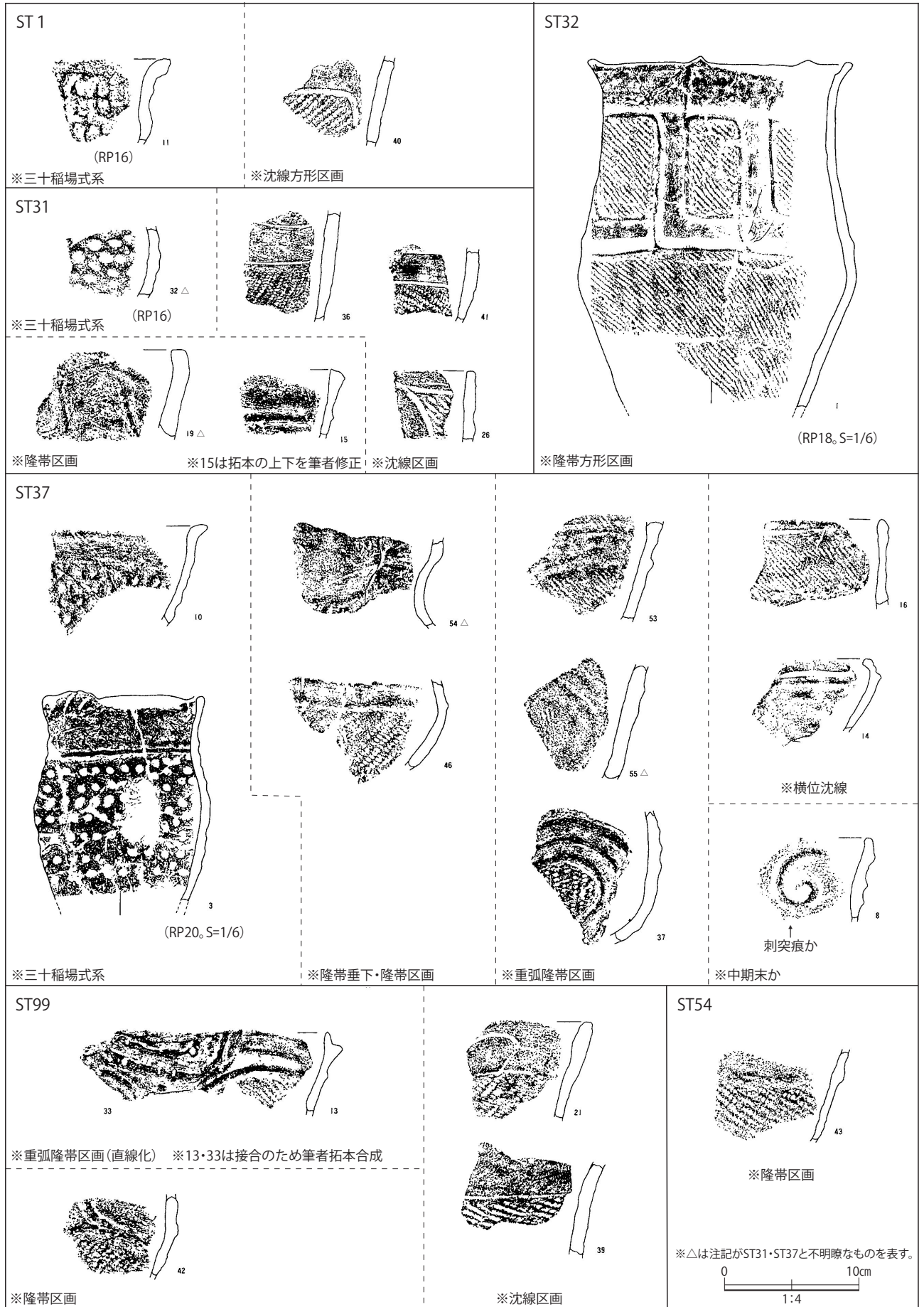
第 5 図 住居一覧図

遺構番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	平面形	軸方位	炉跡	柱穴	床面	堆積土	深さ(cm)	遺物量	三十稲場式系	報告遺物	時期	備考
ST 1	22～23-6～7	6.17	3.45	楕円形	33° - E	—	4 基	凹凸	3 層	20	土器・石器 1 箱	○	11・40・60	後期初頭 新相	全体に攪乱
ST 8	20-10～11	7.7	3.3	方形	23° - E	地床炉 (EL111)	12 基	—	2 層	19	土器・石器 少量		57 (底部網代 で ST 1 と同じ)	後期初頭か	ST 9 と重複も 区別不明瞭。 木根攪乱多。
ST 9				方形	23° - E	石囲炉 (EL 3)									
ST31	20-10～11	6.3	2.68	方形	23° - E	石囲炉(EL 2) 地床炉(EL93)	12 基	—	2 層	19	土器・石器 少量	○	15・19△・ 26・32△・ 36・41	後期初頭 新相か	ST 1 と同じ網 代底部。土層断 面 ST32→31
ST32				方形	23° - E	土器転用炉 (EL113)									
ST37	20～21-7～8	5.7	3.6	不整 楕円形	2° - W	地床炉 3 基 (EL94.95.96)	14 基	平坦	5 層		土器・石器 1 箱	◎	3 (RP20)・8・ 10・14・16・ 32・37・46・ 54△・55△	後期初頭 新相	東壁が木根で 不明瞭。直線的 な石組(RQ14)。 土器まとまっ て出土。
ST54	22～23-10～11	4.2		ほぼ 円形	14° - W	地床炉 (EL94)	19 基	平坦	3 層	10	土器・石器 1 箱		2 (RP 2 覆土 に正位)・43	後期初頭古 相	東壁が木根で 不明瞭
ST99	23～24-7～8	5	4.6	ほぼ 楕円形	9° - E	地床炉 (EL110)	9 基	平坦	8 層	20		△	13+33・21・ 39・42	後期初頭 古～新相	報図 27 三十稲 場系は同一グ リッド。

※ 表は、報文を基に筆者が抽出・判断し作成。「深さ」は確認面からの深さで、報文中にない場合は筆者が断面図から最深部を計測した。

※ 「軸方位」は、真北を基準として東西の傾きを表す。「報告遺物」の数字は報告書図版の通し番号を表す。△は注記不明瞭。

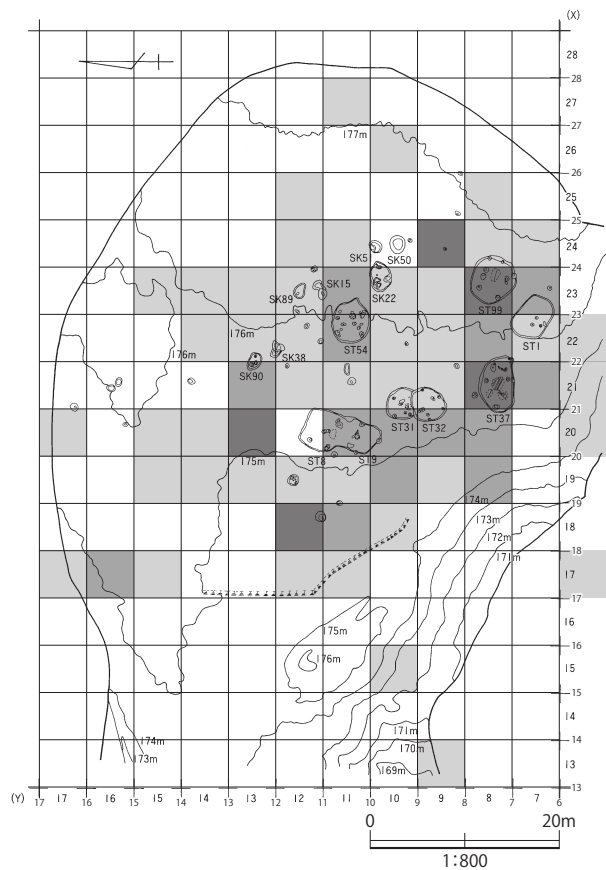
※ 「三十稲場式系」は体部刺突文など所謂三十稲場式土器に類似した「三十稲場式系土器」の有無を表す。



第6図 主な出土土器(1)



第7図 主な出土土器(2)



第 9 図 蕨台遺跡の石器組成

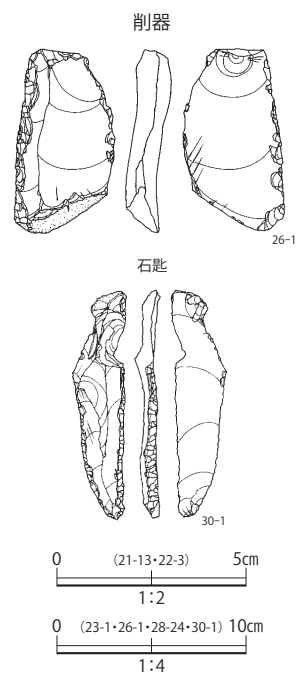
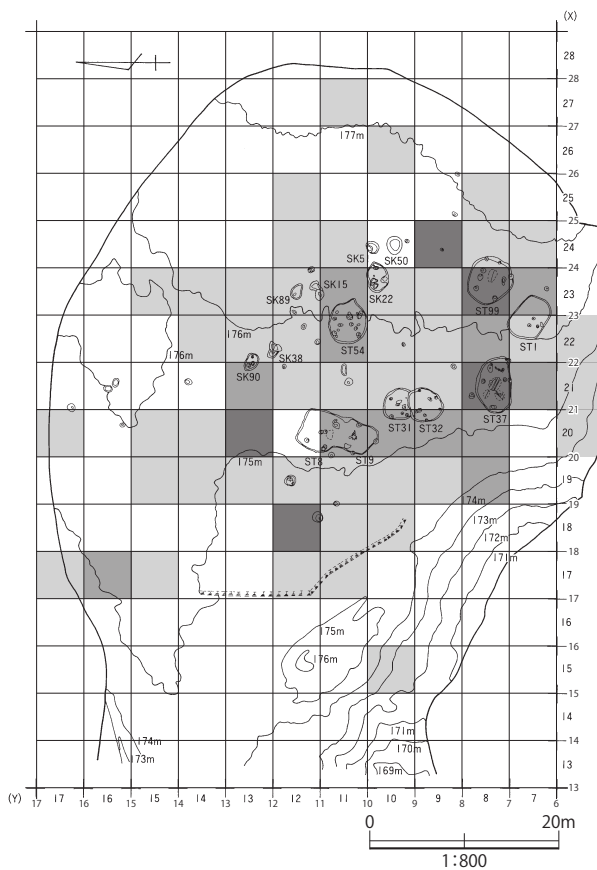
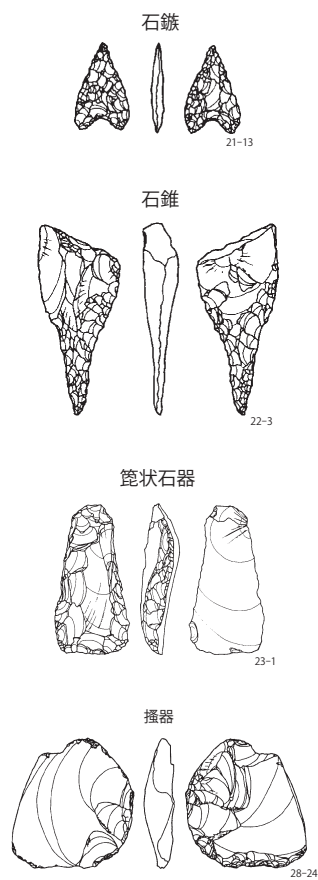
種別	器種	点数	比率(%)	備考
剥片石器	石鏃	16	8.6	石材多様
	石錐	8	4.3	
	筥状石器	30	16.1	
	搔器・削器	37	19.9	不定形石器
	石匙	12	6.5	
	計	103	55.4	
	二次加工	123		報文に測図なし
礫石器	磨製石斧	30	16.1	
	凹石	29	15.6	
	磨石	16	8.6	
	石皿	8	4.3	観察表未掲載
	計	53	28.5	
	総計	186	100.0	定形石器

※比率は定形石器（二次加工のある石器を除く）を表す。

凡例
剥片石器類・礫石器類
磨製石斧
■ : 1点～
■ : 3点～
■ : 5点～

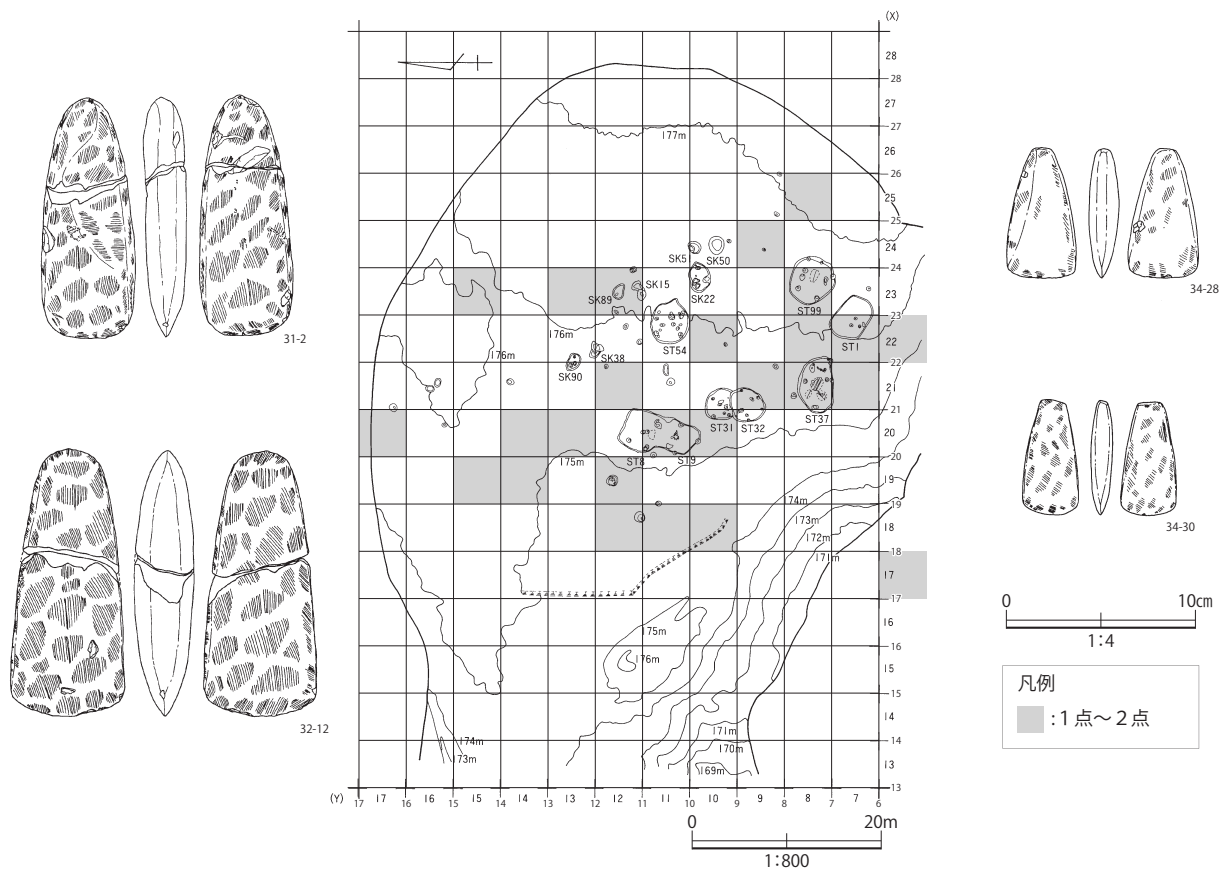
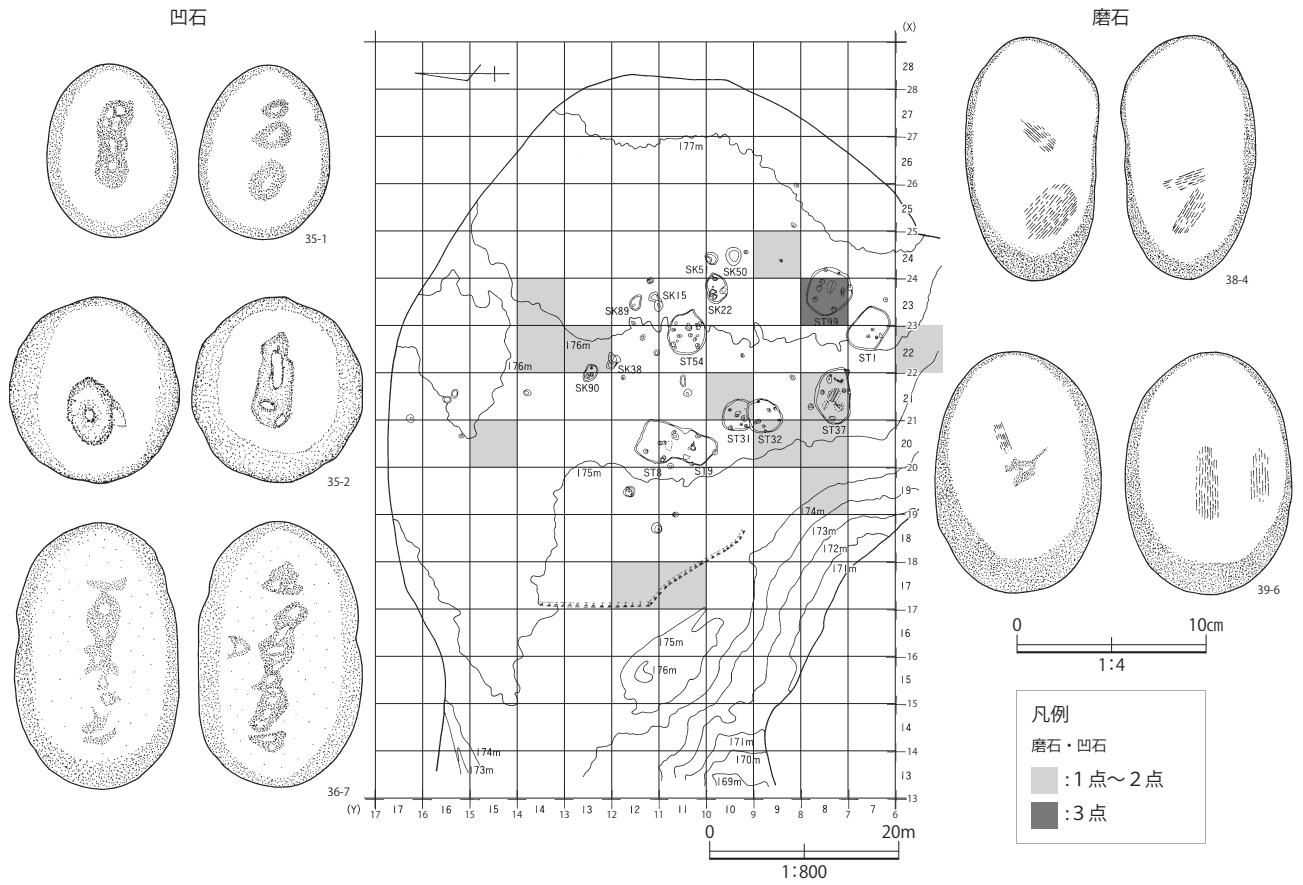
※グリッドは北向きで北西角の交点で計測。
※図外グリッド出土・表採出土の石器等は除く。
※石器の右下数字は報告書番号を表す
(第11～15図)。

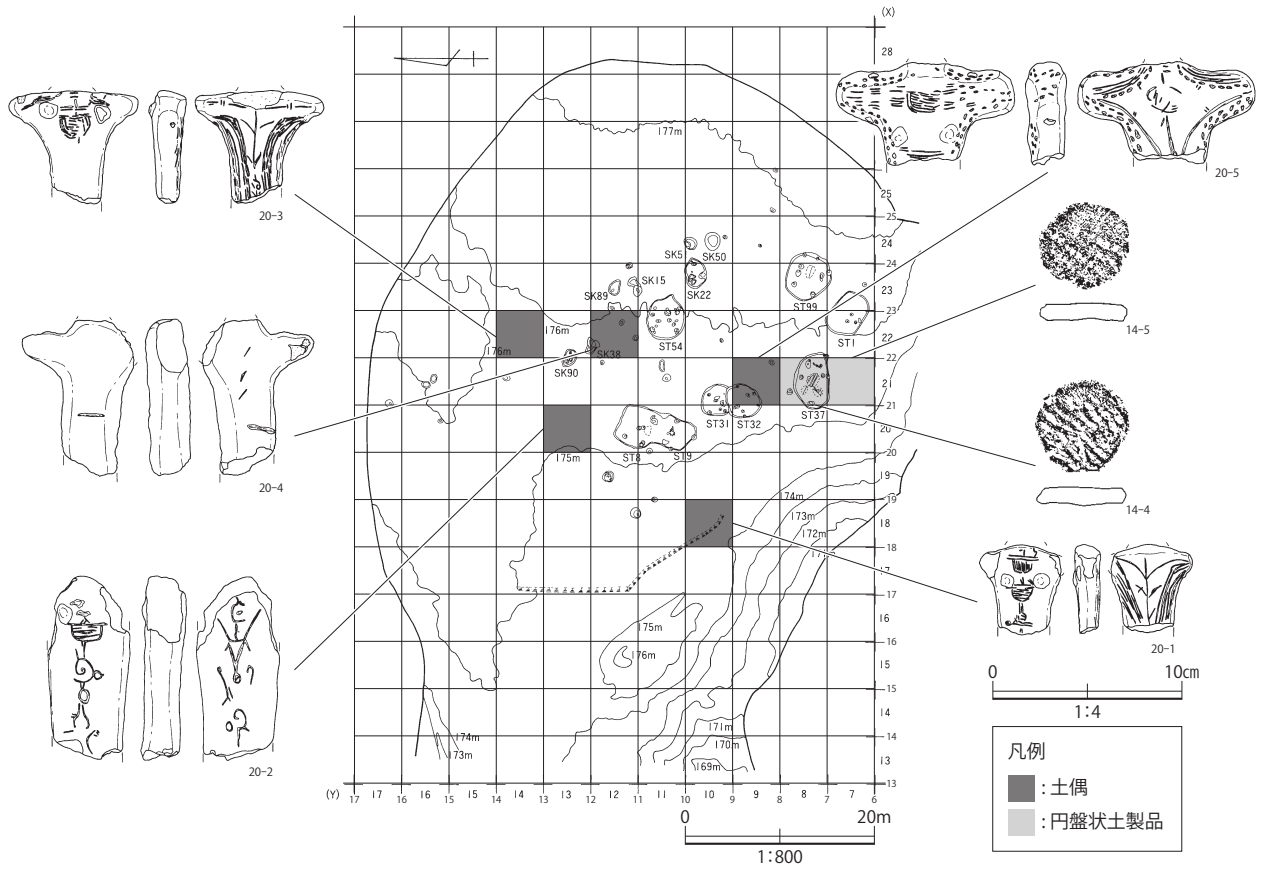
第 10 図 石器類の総出土分布図



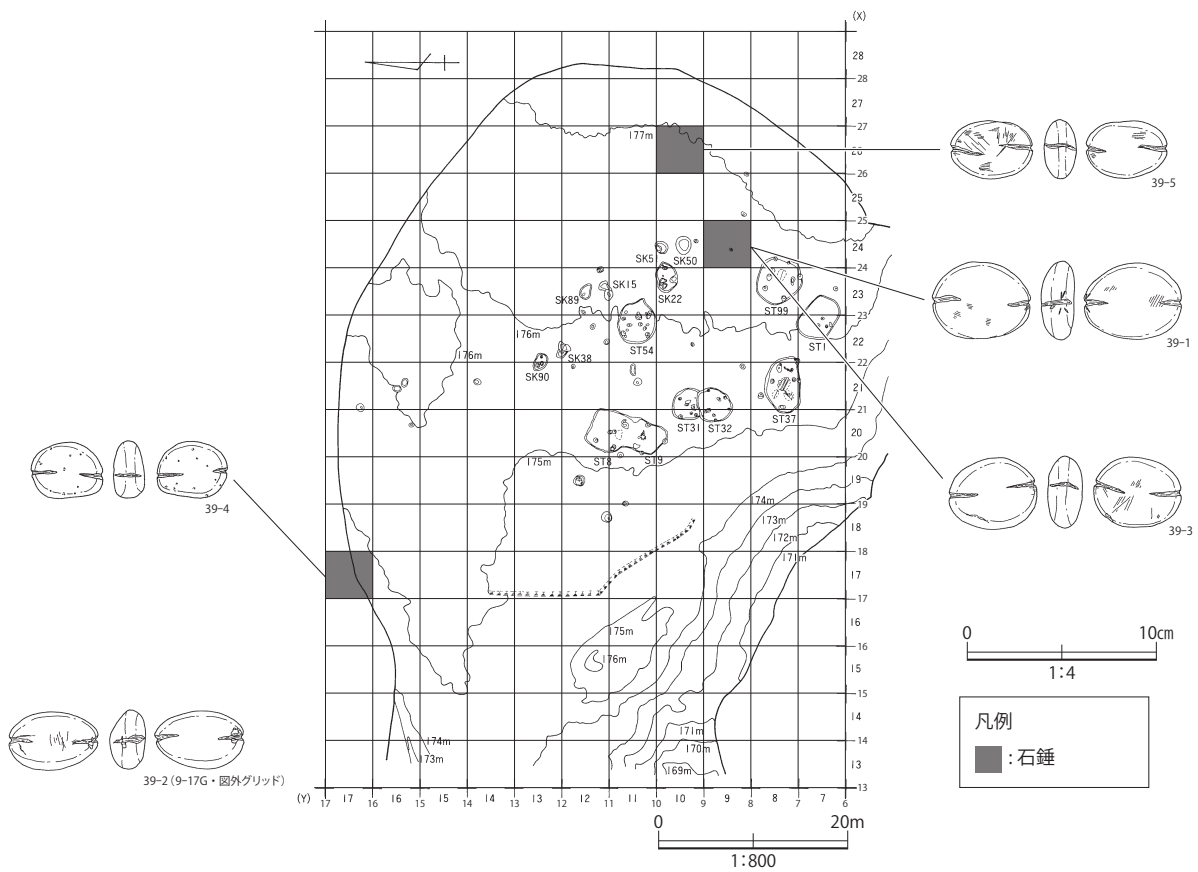
凡例
石鏃・石錐・筥状石器
搔器・削器・石匙
■ : 1点～
■ : 3点～
■ : 5点～

第 11 図 剥片石器類の出土分布図





第 14 図 土偶・円盤状土製品の出土分布図



第 15 図 石錘の出土分布